古典の叡智 4

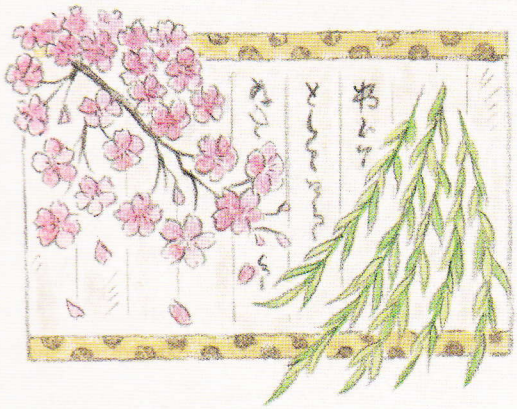
大阪教育大学教授
小野恭靖

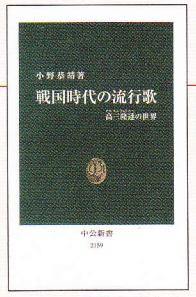
柳は緑、花は紅（くれない）

（『隆達節（りゅうたつぶし）』より）

戦国時代から江戸時代初期頃に流行した『隆達節』の慣用句。『隆達節』には「梅は匂（にほ）ひ、花は紅、柳は緑、人は心」「ただ遊べ、帰らぬ道は誰も同じ、柳は緑、花は紅」と用いられている。この言葉の出典は中国の禅語「柳緑花紅」で、それぞれのもっとも自然に近い本質をいう。柳は緑色が、梅の花は紅色がそれぞれの本質をもっともよく表している、というのだ。中国では「花」は梅であり、その紅色が愛された。一方、日本では「花」は桜であり、その色艶（いろつや）の美しさが尊ばれ、「梅」の方は香りが愛（め）でられることとなった。『隆達節』では「梅は匂ひ」「花（桜のこと）は紅」と梅と桜の両方を歌い、「柳は緑」と続けた後、眼目ともいえる「人は心」を最後に歌う。私たち人間にとっては、心こそがもっとも大事な本質だというのである。

また、『隆達節』には一度限りの人生を精一杯楽しむことをすすめる「ただ遊べ、帰らぬ道は誰も同じ」を、この慣用句の前に置く歌詞もある。明日の命もわからない戦国の人々にとって、ひたすら楽しむことが人の自然な生き方と考えられていたのである。





小野恭靖さんの最新刊

『戦国時代の流行歌（たかさぶりゅうたつ）－高三隆達の世界－』

中央公論新社　定価 840 円

『隆達節』の創始者、高三隆達の生涯や『隆達節』の代表歌を紹介。当時の「流行歌」の世界を描いた一冊です。